

多賀城跡

第 90 次調査現地説明会
平成 28 年 9 月 17 日 (土) 午前 10:30~

宮城県多賀城跡調査研究所



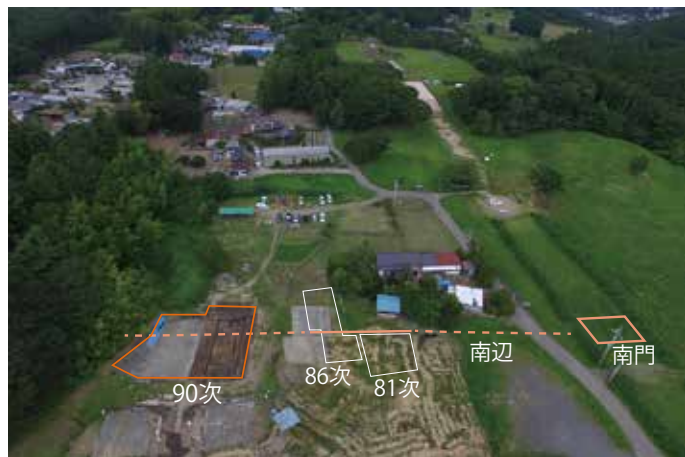
図版 1 多賀城航空写真と調査区の位置 (南西から)

はじめに

当研究所では昭和 44 年以來、特別史跡^{たがじょう}多賀城^{あと}跡の発掘調査を継続して実施しています。近年は多賀城の外周りを^{がいかくせつ}囲む外郭施設の調査を進めており、今年度は^{さかした}坂下地区で^{なんべん}外郭南辺の調査を実施しました (図版 1)。

多賀城跡第 I 期の外郭南辺は、第 II 期以降の位置よりも、約 120m 北側にあったことが近年の調査で分かってきています。

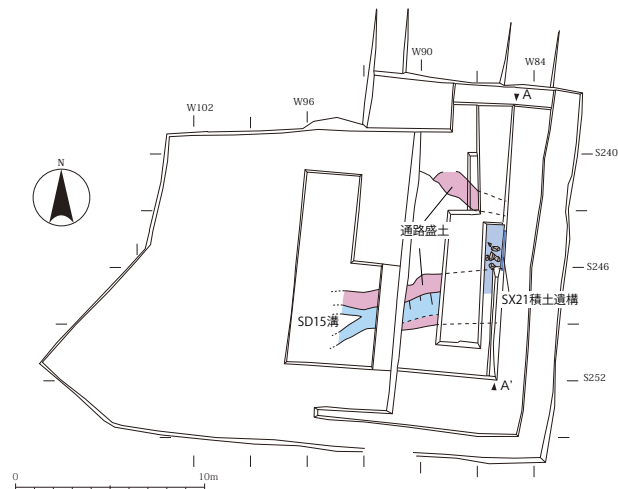
今回の調査は、低地から丘陵に上がる地点を調査し外郭南辺の規模・構造・変遷を解明することを主な目的としています。



図版 2 第 I 期の外郭南辺と調査区の位置 (南から)

調査区内の地形は北西側が高く南東に向かって低く傾斜しています。調査は、古代の遺構が最も良く残るとみられる東側を先行して掘り下げました。その結果、以下のような遺構を検出しました。

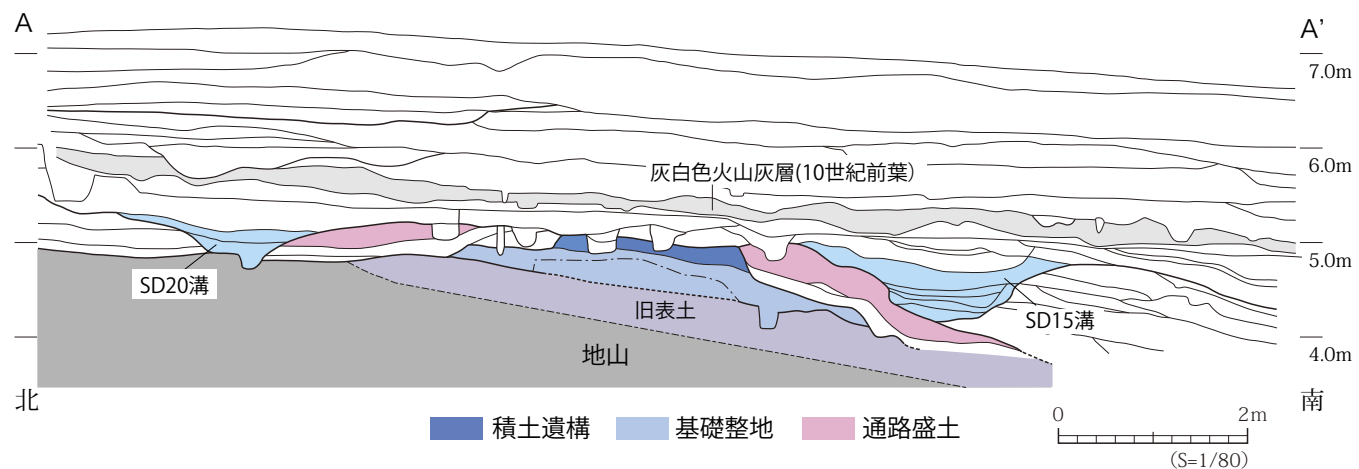
- ①多賀城跡第Ⅰ期の積土遺構とその基礎整地
 - ②第Ⅱ期以降の通路
 - ③灰白色火山灰降下（10世紀前葉）以降の井戸・畑の畝
- また、出土した遺物には土器、瓦、木製品などがあり、注目すべき資料として文字の書かれた檜扇が通路脇から出土しました。ここでは、主な成果として遺構の①と檜扇について説明します。



図版3 調査区平面略図 (S=1/400)



図版4 東壁断面写真（西から）



図版5 東壁断面図

成果 1 第 I 期の外郭南辺について

第 I 期の外郭南辺となる積土遺構^{つみつちいこう}を調査区東端で検出しました（図版 6）。南北幅約 2.0m で高さは約 20cm 残っており、黄褐色の土と黒色の土を交互に平らに盛る方法で積み上げられています。その積み方は「版築」と呼ばれる技法に似ており、築地塀の可能性^{つじべい}があります。積土遺構の下には、土台となる基礎整地^{きそせいち}が南北幅約 4.5m の範囲に認められます。厚さ 30~40cm の黒色土を中心とした土で、一部には人頭大ほどの石が含まれています。

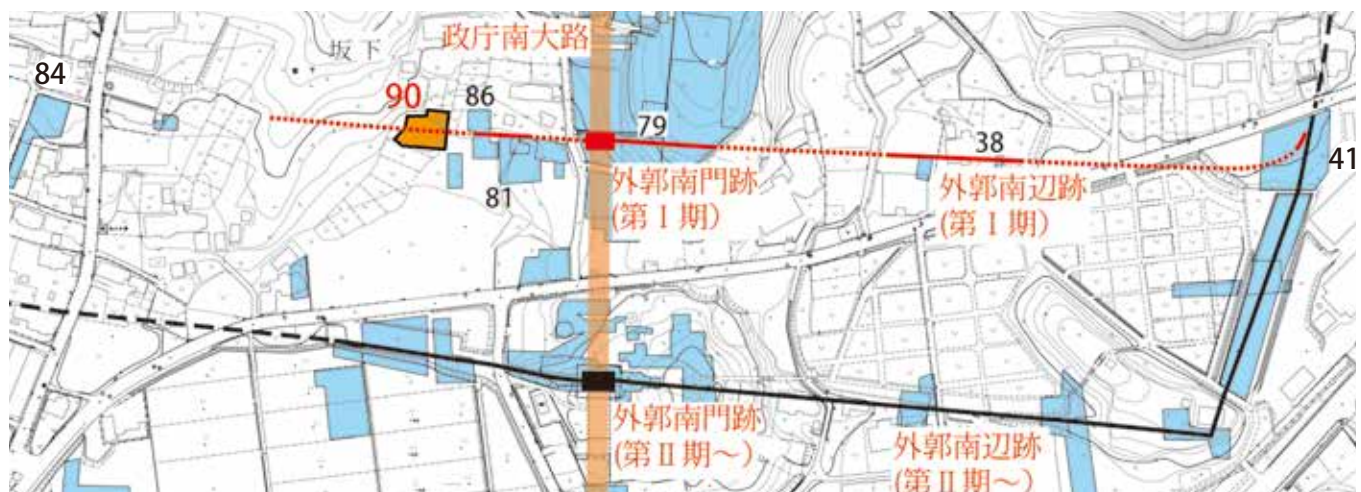
これらの遺構から、政庁南大路^{せいちょうみなみおおじ}から西に約 90m のところまで、第 I 期の外郭南辺が延びていたことが分かりました。また、約 20m 東の低地における外郭南辺は、材木塀^{ざいもくべい}でしたが（図版 7）、今回の調査で、西側の丘陵では築地塀である可能性が高まりました。



図版 6 東壁断面拡大写真（西から）



図版 7 第 86 次検出の材木塀（西から）



図版 8 外郭南辺の位置

成果 2 第 II 期以降の通路について

第 II 期に外郭南辺が南側に移動した後、その高まりを利用してつくられた東西に延びる通路を検出しました。これは、第 86 次調査で検出していた通路の延長で、路面は見つかっていませんが両側に明褐色の盛土を確認しています。南北の幅は 4~6m 以上で、西側の丘陵に向かって広がる形をしており、時間がたち両側に土砂が堆積した後には両脇に側溝が掘られています。通路が東側から西側の丘陵へ続くことがより明確になり、未調査ですが、通路の先の丘陵にはなんらかの施設の存在が想定されます。



図版 9 第 II 期以降の通路（南西から）

成果3 ^{ひおうぎ}檜扇について

今回出土したのは、「骨（橋）」とよばれる複数の細長く薄い板材を重ねて綴じた、木製の扇です。重なり方や接合状況などから、11枚分あることが分かっています。第Ⅱ期以降に使われた通路の南側堆積層からまとまって出土しており、元は1つの扇だったと考えられます。また、両面には多くの文字が書かれています（図版12・13）。

骨の長さは24.6～28.5cmで長さの違いがあり、先端を斜めに切ったものや、比較的平らなものがあります。幅は2cm～3.5cmで、手元から先端に向かって徐々に広くなり、側面を浅く^{えぐ}抉って整形しているものもあります。厚さは1～2mmで、手元には^{かなめあな}径2～3mmの要孔があります。

文字の内容は解読中で、同じ文字を続けて書かれた所は、役人が文字の練習をした^{しゅうしょ}習書とみられます。また、文字は骨の左側に寄ったものが多くみられますが、右側に寄るものもあり、扇の開き方と関連すると考えられます。送風具以外の、当時の扇の使い方を考えるうえで重要な資料といえます。

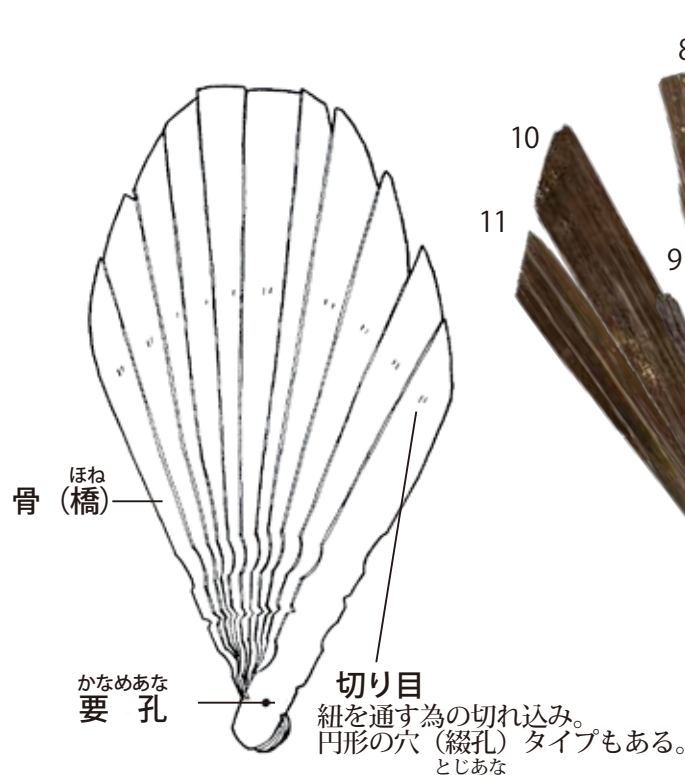
檜扇は、県内では山王遺跡（多賀城市）、熊の作遺跡（山元町）に出土例がありましたが、文字が書かれた檜扇は県内では初めての出土で、貴重な発見となりました。



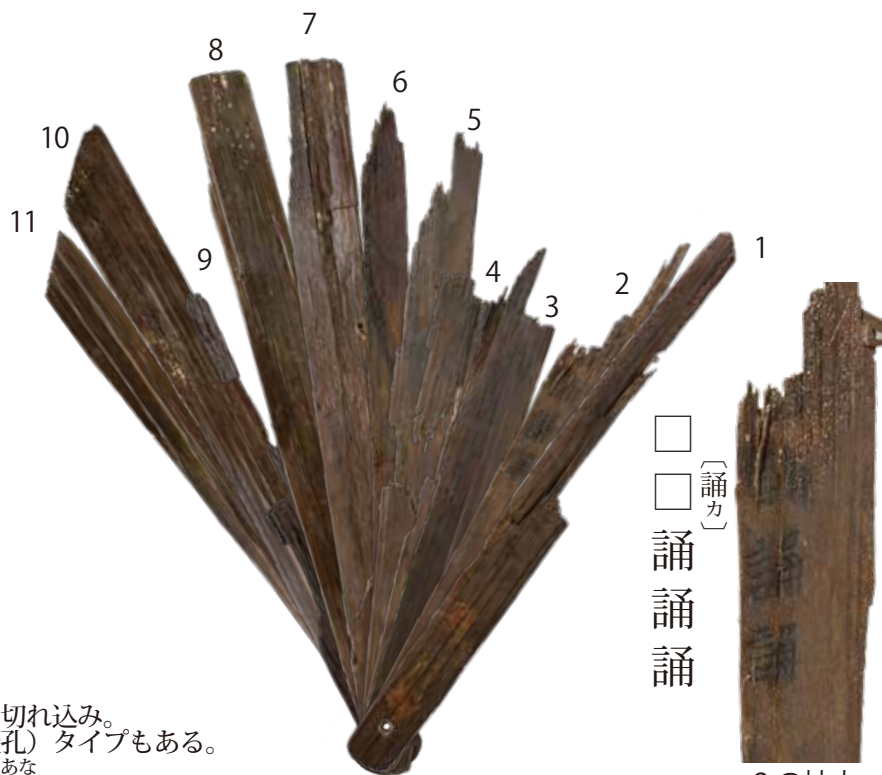
図版10 出土状況（南西から）



図版11 出土した状態の檜扇



図版12 檜扇の名称と復元イメージ
（『奈良国立文化財研究所 1985』に一部加筆）



図版13 出土した扇の復元イメージ (S=1/3)

- ・第Ⅰ期の外郭南辺を政庁南大路から西に約90mの箇所まで確認しました。低地では材木塀であることがわかっていましたが、西側の丘陵では築地塀である可能性が高まりました。
- ・第Ⅱ期に外郭南辺が南側へ移動した後、第Ⅰ期の外郭南辺の高まりを利用した通路を確認しました。通路の先にある西側の丘陵に、^{じつむかんが}実務官衙のような何らかの施設の存在が想定されます。
- ・県内で初めてとなる文字の書かれた檜扇を発見しました。地方官衙での文字が書かれた檜扇の出土は全国的にも貴重です。文字が多数書かれていることに加えて扇の形状も良く残っており、全体の構造や当時の使用方法を知るうえで重要な発見といえます。

【参考文献】

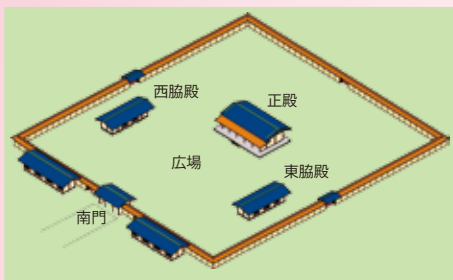
奈良文化財研究所 2010 「檜扇」『平城京事典』 pp 177-178

奈良国立文化財研究所 1985 奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 『木器集成図録 近畿古代篇』

たがじょうあと
-多賀城跡について-

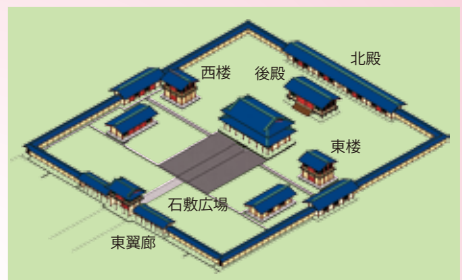
特別史跡多賀城跡は、奈良・平安時代の中央政府が^{むつ}陸奥国を治めるために置かれた^{こくふ}国府の跡で、奈良時代には^{ちんべい}鎮兵という兵士を^{ちんじゅふ}統率する鎮守府も置かれていました。

これまでの政庁跡の発掘調査によって、多賀城の変遷は考古学的に第Ⅰ期から第Ⅳ期までの4時期に大別できることが明らかになりました。この変遷は、城内の他の地区の遺構をみる際にも有効です。



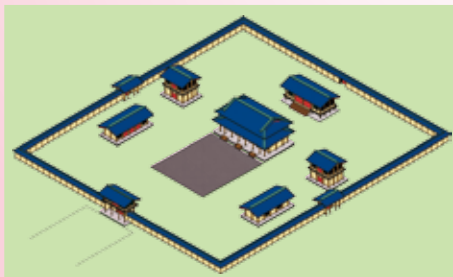
第Ⅰ期

^{じんき}神亀元(724)年 創建～^{てんぴょうほうじ}天平宝字6(762)年 修造



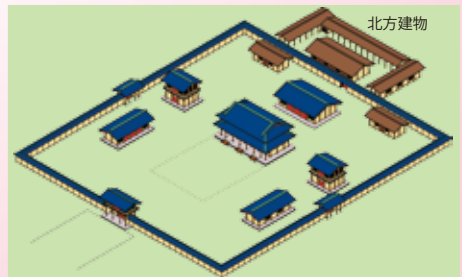
第Ⅱ期

天平宝字6(762)年 修造～^{ほうき}宝亀11(780)年 ^{こればりのきみあざまる}伊治公皆麻呂焼討



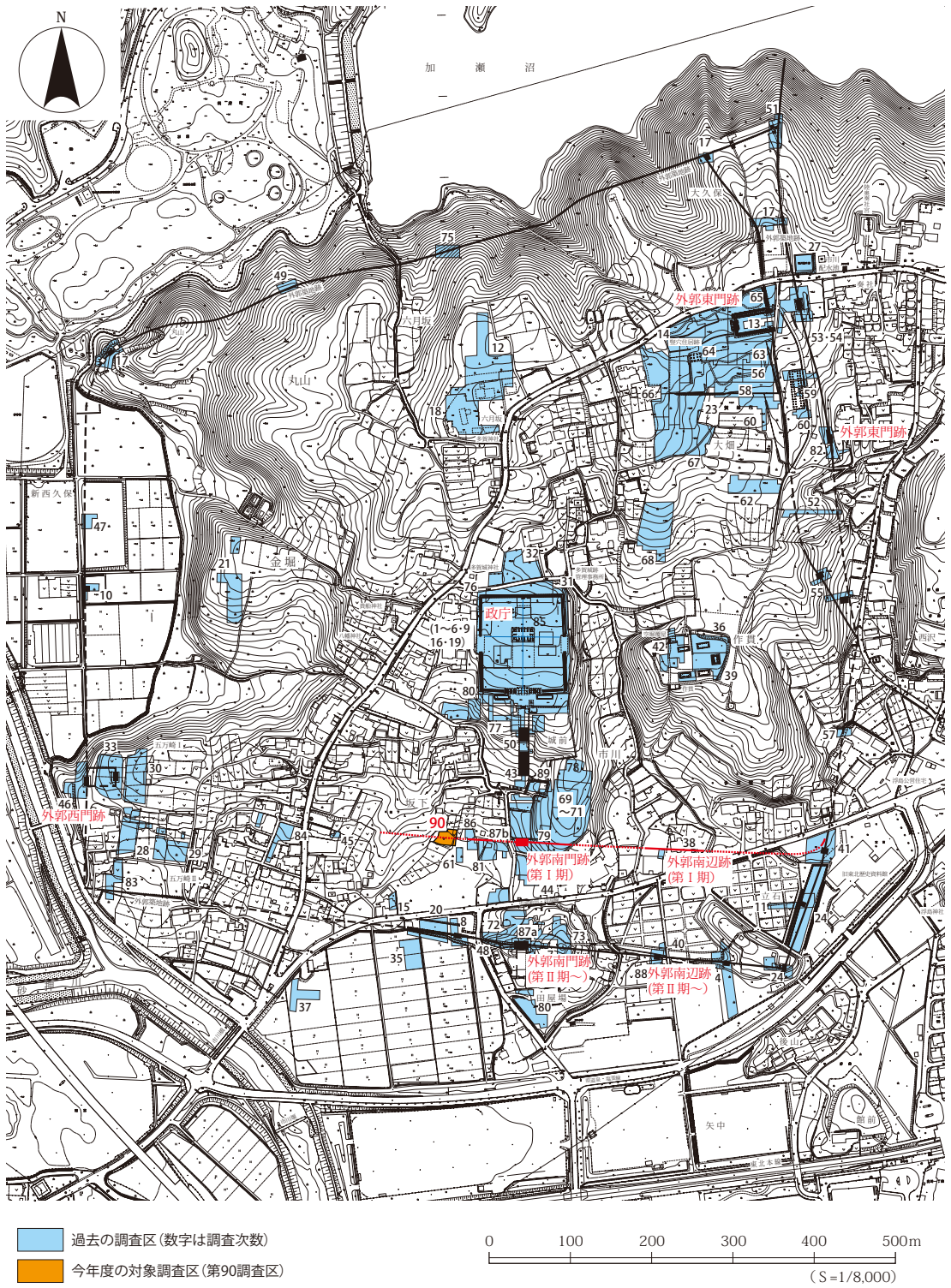
第Ⅲ期

宝亀11(780)年 焼討～^{じょうがん}貞観11(869)年 陸奥国大地震



第Ⅳ期

貞観11(869)年 大地震～11世紀中頃



図版 14 多賀城跡全体図と調査区的位置

調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字坂下地内

調査指導：多賀城跡調査研究委員会（委員長 佐藤 信）

調査主体：宮城県教育委員会（教育長 高橋 仁）

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所（所長 須田 良平）

調査協力：多賀城市教育委員会

調査員：須田 良平・吉野 武・三好 秀樹
白崎 恵介・廣谷 和也・高橋 透

調査期間：平成 28 年 5 月 23 日～平成 28 年 9 月（予定）

調査面積：約 430 ㎡



多賀城跡調査研究所

〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1-22-1

TEL：022-368-0102

FAX：022-368-0104

<http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/>